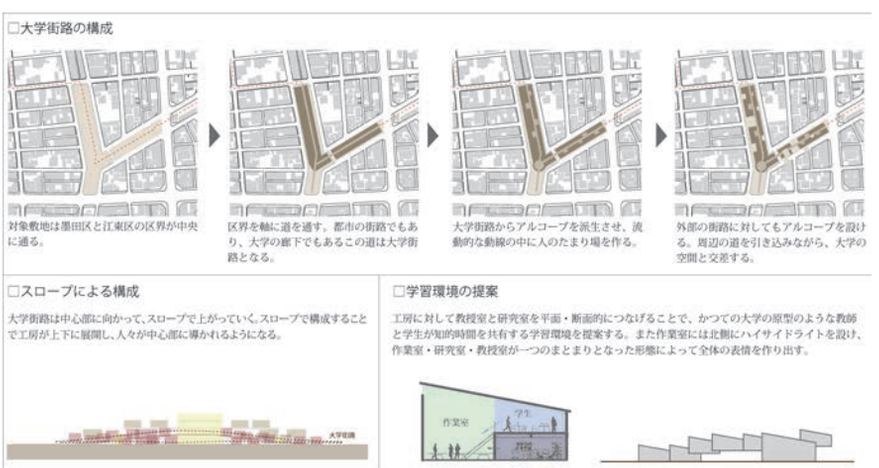
下町の学堂

―河川の記憶と交差する大学の空間

佐藤 みなみ
Minami Sato

2013 年度修士設計優秀賞



塀に囲まれたキャンパスやオフィスビル化した校舎。こうした都市に対して閉じられた管理過剰な大学が増えていく中で、街と共存共栄する大学を計画することで都市と大学の在り方について考える。

敷地は墨田・江東。水路と共に産業や文化が発展したこの地域も今では産業の衰退が徐々に進行している。日本のものづくりの文化を支えるためにも、この地域の産業を継承することは重要であると考えられる。

そこで、人口河川が埋め立てられた地に墨田・江東の産業の継承を目的とした大学を提案する。

・河川の記憶から構成する『大学街路』

かつての河川の軸である墨田・江東の区界を軸に通した道は、大学の廊下であり街の街路でもある『大学街路』となる。スロープ状の『大学街路』沿いには主に工房が並び、この道を歩いていくと工房の内部や学生の活動、地域の風景が見え、大学全体が産業のショールームと化す。

・学習環境の提案

工房に対して教授室と研究室を平面・断面的につなげることで、かつての大学の原型のような教師と学生が知的時間を共有する学習環境を提案する。

水運として物資を町へ運び周辺に産業をもたらした河川の記憶は、都市に開かれた大学の空間と重なることで、地域の産業を継承していく『下町の学堂』として現代に甦る。